

奈良・平城宮跡(第七次)

1 所在地 奈良市佐紀町

2 調査期間 一九六一年(昭三六)七月～一九六七年二月(第七次)

3 発掘機関 奈良国立文化財研究所

4 調査担当者 小林剛

5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡

6 遺跡の年代 奈良時代～平安時代初期

7 遺跡及び木簡出土遺構の概要

平城宮跡では、前項でとりあげた木簡につづき同じ推定大膳職跡から二点の木簡が出土した。木簡が検出された遺構は、大膳職跡に東西に並ぶ三つの井戸のうち中央の井戸(BE311)である。発掘調査により、この井戸は長岡遷都に際して一旦廃絶され、平城上皇時代に先の井戸を壊して同じ場所に新しい井戸を作り再使用されたが、平城上皇の死による平城宮の廃棄により再び廃絶されたことが判明した。木簡は古い方の井戸(A井戸)から一点、新しい方(B井戸)から一点出土している。A井戸からは、そのほか土器、万年通宝銭、神功開宝銭、呪詛の人形、斎串、木櫛、「養所」墨書土師器甕などが検出され、B井戸からは土器、緑釉陶器、土馬、隆平永宝銭や多量の瓦、陽物形木器、斎串、木櫛、漆器、難波津の歌を墨書した土器等が検出されている。

8 木簡の釈文・内容

(1) 山 (22)×27×5 039 四二号

(2) 「政津守貞成 御匣殿七人 (29)×18×3 019 四一号

〔豊か〕〔難か〕

(1)はA井戸より、(2)はB井戸よりそれぞれ出土したものである。(2)については前項の場合同様、実物にあたって釈文を改めた。(2)の意味は明らかでないが、おそらく仕事の割りりや物品の請求に係する木簡であろう。「津守貞成」「御匣殿」については『平城宮発掘調査報告』Ⅳに詳しい。

9 関係文献

奈良国立文化財研究所 『平城宮発掘調査報告』Ⅱ 一九六二年

榎本亀治郎・岡田茂弘 『平城宮跡第六・七次発掘調査概要』 一九六二年

奈良国立文化財研究所 『平城宮発掘調査報告』Ⅳ 一九六七年

同 右 『平城宮木簡』Ⅰ 一九六九年

同 右 『平城宮発掘調査報告』Ⅶ 一九七六年

(東野治之)